

## 主よ、御心のままに

[マタイによる福音書 26 章 26～36 節]

それから、イエスは弟子たちと一緒にゲツセマネという所に来て、「わたしが向こうへ行って祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。ペトロおよびゼベダイの子二人を伴われたが、そのとき、悲しみもだえ始められた。そして、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい。」少し進んで行って、うつ伏せになり、祈って言われた。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」それから、弟子たちのところへ戻って御覧になると、彼らは眠っていたので、ペトロに言われた。「あなたがたはこのように、わずか一時もわたしと共に目を覚ましていられなかったのか。誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」更に、二度目に向こうへ行って祈られた。「父よ、わたしが飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのであれば、あなたの御心が行われますように。」再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠ったのであるそこで、彼らを離れ、また向こうへ行って、三度目も同じ言葉で祈られた。それから、弟子たちのところに戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。時が近づいた。人の子は罪人たちの手に引き渡される。立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」

### [1] 神様がして下さったことを思い起こす時

今、教会の暦は**イエス・キリストの受難を覚える季節**を迎えています。毎年毎年これは繰り返される訳です。4/4の復活節・イースターも、また12月のクリスマスも私たちは毎年迎えます。その意味では「年中行事」だとも言えます。しかし私は思ってしまったのですが、これはいわゆる「イベント」というものではないのだということです。年間行事・イベントといったものは、例えば〇〇大会とか、体育祭とか、卒業式とか、お祭りとか、それは私たちが計画し、準備し、実行するものです。けれども、復活節やクリスマスなどはそうではないですね。これは、**神様がして下さったことです。人間のために！**しかも大切なことは、これは、もう歴史上繰り返すことはないということです。「教会歴」というものが存在ということは、そこで私たちが新しく何かをするということではなく、神様がして下さった出来事を思い起こす(想起する)ということが肝要なのだと思います。

今朝の礼拝で、私たちは「**ゲツセマネの祈り**」の箇所が与えられました。週報に

も書かせて頂きましたが、今週から礼拝の中で、私が一方的に話をして終わるとい  
うのではなく、まず各々が静かにみ言葉に聴く「黙想」の時間を取り入れたい  
と思っています。神様が、今、この私にここから何を語って下さるのか、—それ  
は一人ひとり、今の自分の心に照らして皆違う訳です。“模範解答”はありませ  
ん—それを聴く時を持たせて頂きましょう。私自身も致します。聖書を手にし、  
**ご自分でみ言葉を開き、思いめぐらして下さい**。私の宣教の原稿も今読まずに（それ  
は出来るだけ礼拝中は目で追わないで頂ければと思います）、**まっさらな心で聖書  
からの語りかけに集中して頂きたい**と思います。それでは今から 3~4 分間ほど  
黙想の時間を持ちましょう。⇒ [黙想の時]

## [2] 祈るとは、自分との戦いを始めること

皆さんは、このみ言葉の箇所からどのようなことを感じられたでしょうか？

私は、特に主イエス様の「わたしは死ぬばかりに悲しい」(38 節)と言われた言葉  
が心に留まりました。この**イエス様の深い悲しみ**が私には分からないと言わな  
ければなりません。しかも、3人の弟子たちを「**ここを離れず、わたしと共に目を覚ま  
していなさい**」とそばに招いています。これ迄イエス様は、独りで山で祈られたり、  
群衆を離れて寂しい所で独りで祈られたという箇所がありますが、ここでは、わ  
たしと一緒にいて欲しいという思いが強く表れています。ここには、イエス様で  
さえも持たれる**深い孤独**があるのではないのでしょうか。孤独です。また私は思  
いました。近くに居て欲しいというのは、**本当に人間を愛している愛なのだ**など。そ  
の直前でペトロの離反の予告もしていますし、その前の主の晩餐の所では、自分  
が弟子(ユダ)によって裏切られるということまでおっしやっているのです。け  
れどもイエス様はここで弟子たちを捨てていませんね。むしろある意味、自分の  
孤独や限界状況の中で、**人間を求めておられる**。イエス様とはそういう神様です。

「**悲しみもだえ始められた**」とあります。そして、**三度も祈った**とありますね。地  
面にひれ伏したとマルコ福音書では書いています。ここでイエス様は、父なる神  
様との間で格闘しておられるのですね。これまでとは明らかに違います。ロバの子  
にまたがってエルサレムに入ってきた時や、主の晩餐の準備をなさった時、そこ  
には動揺があるようには見えません。しかし、このゲツセマネの祈りで、主は平  
静さを失っておられます。もだえ苦しむようにして「死ぬばかりに悲しい」と神  
様に訴えておられます。そして最後に言います。「**御心のままに**」と。

ある牧師が「祈るとは、自分との戦いを始めることです」と言われました。「我  
意と我が儘に満ちた世界で**“わが思いではなくみ心のままになさって下さい”**という  
戦い、それが祈りだ」と言うのですね。私は気が付くと、自分の願いや願望のお

祈りが本当に多いなあと思うのです。それが悪いということではないでしょう。しかし、祈りの最終地点は、「御心のままに」なのです。それは一言で言うと、自分（の思い）というものを「断念」ということだと思えます。

今日の箇所で飲まなければならない「杯」とあります。これはイエスにとって「死」を意味します。しかもそれは「肉体の死」以上のことだと思えます。あの十字架の上の言葉を思い起こさせます。「わが神、わが神」と信頼の言葉を投げかけながら「なぜ、私をお見捨てになったのですか」（レマ・サバクタニ）と祈られたあの言葉をです。それは詩編 22 編からの祈りの言葉だと言われます。しかしその、神の御心が分からなくなってしまった絶望の淵からの叫びを、事もあろうに、神の独り子であるイエスが叫んでいるのです。「神様に捨てられる」ということが、「この杯を過ぎ去らせて下さい」との「杯」の内実に違いありません。それがどれ程の恐ろしいことなのか、私たちは分かるでしょうか？そのような「杯」をまともに飲み干した方、それは主イエス様以外にありません。

バッハの「マタイ受難曲」の中でバスが、この場面を注釈するようにして、このような言葉を語ります。第 22 曲です。

「救い主は父の御前にひれ伏された。

こうして主は私とすべての人を

奈落の底から 神の恵みへと高めてくださるのだ。

主は死の苦しみである杯を、飲みほす覚悟でおられる。

そこにはこの世のすべての罪が注がれ、悪臭を放っている。

この杯を飲むこと、それが神のみこころにかなうことなのだ。」

とても深い歌詞だと思います。イエス様はこのゲツセマネで、もう既に十字架にお架かりになっている、と言って良いのだと思います。突っ伏して汗を血のように滴らせ、格闘しているイエス。そして、その脇で眠りこけてしまっている弟子たちがいます。シュラッターという聖書注解者はこう言います。「彼らはイエスと共に苦しもうとしないのに、イエスは彼らのために苦しまれた。そしてイエスは彼らをお叱りにはならなかった」と。一弟子たちには、いいえ、私たちには、本当にはイエスの苦しみの懐に分け入るなんていうことは不可能なのです。私たちは眠ってしまうほど救いについて鈍感なのです。ただ主ご自身が、ご自分の為ではなく私たちの救いについて文字通り命賭けだと言うことですね。そして私たちの罪も弱さも全部ご存じの上で、主は十字架にお架かりになるのです。—「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さった」（ヨハネ 4:10）のです。

### [3] 私たちも「主よ、御心のままに」と祈ることが出来る

私たちは、信仰の故に最期殺されていった「殉教者」と呼ばれる人々のことを知っています。26 聖人とか、コルベ神父とか、ボンヘッファとか…。イエス様も、そのような自ら死を厭わなかった「殉教者」なのではないでしょうか？私はそれは似ているようで、決定的に違う部分があるのではないかと思いました。イエス様以外の殉教者は、言ってみればイエス様に支えられて、イエス様の死の姿にあやかるとような最期を遂げることが出来ていたのだらうと思います。けれども、イエス様の場合は、「エリ・エリ、レマ・サバクタニ」なのです。「わが神、わが神、なぜ、私をお見捨てになったのですか」と、本当に神様に捨てられるという経験をなされたのです。その間の深さは誰にも分かりません。この経験をなされた方はイエス・キリストだけです。まるでサタンが勝利したかのようにして、イエスは死なれました。私たちの人生もそういうことがあると思います。理由が見えない死。災害、病気、事故、殺人、自死…。そのような死と主イエス様の死とは無関係ではないのですね。それは、どのように私たちが死んだとしても、イエス・キリストの故に神様は覚えておられるということだと私は信じます。本当に主は、絶望の内に死んで下さった。“死に切って” 下さった。だからこそ神様はその主イエスを「良し」とされて甦らされたのだ、と聖書は語っているのではないのでしょうか？

私たちもやがて死んでいく時が来るでしょう。それは辛いかもしれませんが。しかし私たちはその時、**ゲツセマネの主の祈るお姿を思い起こす**ことが許されると思います。そして今、私たちは主に愛されている者として、「主よ、御心のままになさって下さい」と、このように祈ることが出来ます！私たちには、この「死」の深さを誰よりも経験された神様がいらっしゃるのです。そして「**立て。行こう！**」とおっしゃって下さるのです。これ以上の幸いはないのではないのでしょうか。

お祈り致します。